

模擬試験 7：解答解説と採点のポイント

問 1：下線部(a)「知的な怠惰」の理由（150 字以内）

解答例：画面の向こう側の他者が持つ歴史や背景を分析しようとせず、自分たちの正義を絶対視して、相手を単純な「悪役」と決めつけることに逃げ込んでしまうからである。自分たちの価値観を問い合わせ手間を省き、アルゴリズムによって強化された安易な正解に安住する態度は、問題の本質的な解決を遠ざけるため。（148字）

問 2：下線部(b)「相克（ジレンマ）」の内容（200 字以内）

解答例：世界と繋がる利便性を求めてデジタル技術を使うほど、アルゴリズムによって自分の好みの情報だけに囲まれ、逆に閉じた世界に隔離されてしまうという矛盾した状況のことである。便利さ（利益）を追求することが、皮肉にも自分を客観視し他者を理解する機会を奪い、社会の分断（境界線）を強固にしてしまうという、目的と結果が正反対になってしまう葛藤の状態を指す。（193字）

問 3：他者との向き合い方と自画像の更新（600 字以内）

解答例：私は、デジタル空間における他者との向き合い方について、自分を不快にさせる意見や異質な価値観を、自らの常識を相対化するための不可欠な「鏡」として受け入れるべきだと考える。私はSNSを利用する際、かつては自分と同じ趣味や政治的意見を持つアカウントばかりをフォローしていた。それにより、私のタイムラインは心地よい賛同の声で溢れ、自分の考えこそが世の中の正解であるという錯覚に陥っていた。しかし、ある時あえて反対意見を持つ人々の議論を読んだ際、自分が無意識のうちに特定のデータに基づいた「フィルターバブル」の中にいたことに気づかされた。この経験は、自分たちの正義が特定のアルゴリズムによって作られた偏ったものであるという自覚を促した。課題文にある「自画像の更新」とは、こうした他者との遭遇を通じて、自分の輪郭を描き直す「知的労働」である。自分と異なる意見を単に「悪いもの」として排除する「知的な怠惰」を排し、なぜ相手がそのような主張をするのかという「価値の体系」を想像する努力が必要だ。島根県立大学で国際関係を学ぶにあたり、私はデジタル空間を単なる情報収集の場ではなく、自己を問い合わせ対話の場としたい。相容れない意見との摩擦を、自らの「常識」を更新する契機と捉え、多極化する社会において暴力によらない調整の道を模索し続ける姿勢を持ちたい。